



土やタネを愛する

公益財団法人 自然農法国際研究開発センター

理事長 伊藤 明雄



日頃より当センターの活動に対し、まして深いご理解とご支援を賜り心から感謝申し上げます。

当センターは、平成24年4月1日より新制度のもと、公益財団法人として新しい一步を踏みだし、1年が過ぎようとしております。この間、自然農法の研究開発、国内外普及、有機農業支援の3つの公益目的事業を柱にし、研究開発事業では、自然農法の技術体系及び品質評価の指針の構築、自然農法品種の育成等に、普及事業では、自然農法技術の実用化と実証展示及び消費者への理解促進等に、有機農業支援事業では、有機JASの認定事業と農水省が進める有機農業参入促進事業に対する支援に重点的な力を注ぎ、国内外における農業の発展のために取り組んでまいりました。その成果につきまして、本誌面で逐次報告してまいり

ます。このような活動ができましたことは、ひとえに当センターをご支援くださいます多くの皆様のご理解とご協力の賜物と改めて深く感謝を申し上げます。

さて、私どもが推進している「自然農法」の主な考え方は、自然の力と人間の努力が融合調和しようとするもので、自然が持っている潜在能力をいかに引き出すかということですが、中でも重要な位置を占めているのが「土」です。私どもは、土を育てることが大切であると考えて「育土」と呼び、重要な栽培要件として位置づけています。生きている土には本来、植物を育てる偉大な力が備わっており、その力が十分に発揮できるように人間が関わるのが重要です。作物は土の力で育つのが基本で、人為的な養分供給はどこまでも補助的なものです。土も命ある生き物としてとらえ、愛情を注ぐことに

よって、土が喜び、土が本来もっている、自己施肥機能・自己耕耘機能・自己浄化機能・自己調節機能を存分に発揮し、健康な作物を育ててくれると考えています。

フランス人ジャーナリストでドキュメンタリー映像作家のマリー＝モニク・ロバン監督映画「モンサントの不自然な食べ物」(レイチェル・カーソン賞、ドイツ環境メディア賞受賞)が最近話題になっていきます。この映画は42カ国で公開され、400万人が見たとされています。日本でも昨年各地で上映されており、遺伝子組み換え作物が環境・人体に与える影響などについて警鐘を鳴らしています。映画の中では、生物の根幹である「タネ」を支配し利益ばかりを追求する現在の「食」の経済構造に大きな疑問を投げかけています。経済のグローバル化が進む現在、命を育む食のあり方を真剣

に見直す時期にきているといえましょう。当センターでは、日本の風土で育まれた在来種を大切に、化学肥料や農薬に依存しない自然農法産のタネを育て希望者に頒布していきます。各地で先祖から受け継がれてきた日本の在来種を後世に引き継ぐべく取り組んでいきたいと思えます。

自然に対する我々の考え方・想いはとても重要です。土を愛し、タネを愛し、作物を愛することにより、自然が我々に豊かさを与えてくれると思えます。今後も、このような観点に立って、農業の発展に貢献していきたいと思えます。皆様方のさらなるご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げます。